

花鳥餘情

四



第十

繪合
松風



僧正慈海

第十一

為雲

權乙女

第十二

玉鬘

みちをたづねてゆくはなはた
うらやまのこころをいかに
まこととていふはなはた
ついでに作られたり

あつたはなはた
あつたはなはた
あつたはなはた

あつたはなはた
あつたはなはた
あつたはなはた

あつたはなはた
あつたはなはた
あつたはなはた

あつたはなはた
あつたはなはた
あつたはなはた

春の東遊と云ふ能の二の事

文々の行のめいといふ事
いふ事あり

文々の事と云ふ能の事

その事と云ふ能の事

その事と云ふ能の事

その事と云ふ能の事

例といふ事

いふ事

いふ事

いふ事

いふ事

李部王記平四年新書

祢唯作云平李の事

名直と云ふ事

いふ事

いふ事

いふ事

いふ事

いふ事

いふ事

いふ事

いふ事

いふ事

十三松風

以何通平一為春名海氏廿歲の事行りよあ
る坊同年と

えんうれ院はくうくそく花ちる里とまに
うけりり行

し女角よ六条院はくうくそく花ちる里とまに
之条の東院はくうくそく花ちる里とまに
多よら條院つくりそく花ちる里とまに
そく花ちる里とまに
まらとんそく花ちる里とまに
ほむらうそく花ちる里とまに
うらうらうそく花ちる里とまに

河海の院あやまらけそく花ちる里とまに
院れ西の對よまらけそく花ちる里とまに
のほむらうそく花ちる里とまに
そく花ちる里とまに

醍醐中子中務の兼明親よ山荘在在井河畔号雄義
くけ親よと明石のとれ母名石の祖又とらう

これ考りうり内れおほ井院はくうくそく花ちる里とまに
後合の春乃末よらけそく花ちる里とまに
思ふよとくゆりぬよとん覺寺れ菊よあうてとらま
んくうら樓霞觀したたけ鞋との庄之ほらま
あうて樓霞寺とよ甲の清淨寺の東よらけそく

才申すこと相付く仰り又一本よたなふ事と

何

重なるもの申す所は其の月日申す事。新くせん
り申すれる事乃そとつらう。内院崩御の事と
しあはれ

りれどもさるくようの事なく。大井よりめせられ
らるまう。あつ物の管経を一人よりせしむ

と申するれ名あつる物なり

小山大將儀之補物高申事。定物高申事。中々將相共
陣座定補先成府奏付殿上。中將奏付後令孫人信忠
を帯孫人信次將次中將執筆。定書高長以下。信將
者付孫人信次。曹依次百五稱唯進之再拜。大長以下將或
お里外をこく

今案物高申すことと申す事。合々の中。東越達
しつら物高申す事。稱さるの中。青長府常
事存すこと。れよりして春日意。賀孫。意。信。依。の。羽
林。東。越。達。事。申。す。人。百。具。て。お。社。政。求。ま。結。行。舞。を。と
舞。ひ。し。陪。後。の。府。生。加。陪。後。と。し。侍。の。官。に。也。陪。後
と。し。和。親。今。節。未。保。歸。ら。相。換。の。大。お。還。の。一。つ。也。
又。子。有。東。越。達。物。高。の。役。を。し。れ。ら。神。宗。の。長
官。人。を。し。と。申。合。人。と。れ。し。つ。ら。う。の。事。は。
青。長。と。し。つ。ら。う。侍。中。結。青。と。し。つ。ら。う。と。れ。ら。り。
長。と。し。つ。ら。う。長。自。青。何。と。ら。う。と。申。す。事。は。
い。つ。け。る。事。本。は。あ。つ。る。事。は。了。了。務。事。の。事。と
思。ふ。事。は。あ。つ。る。事。は。了。了。務。事。の。事。と

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, starting with a large initial character.

Handwritten text in cursive script, continuing the text from the previous line.

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or a specific phrase.

Handwritten text in cursive script, continuing the text from the previous line.

Handwritten text in cursive script, continuing the text from the previous line.

Handwritten text in cursive script, continuing the text from the previous line.

Handwritten text in cursive script, continuing the text from the previous line.

Handwritten text in cursive script, continuing the text from the previous line.

Handwritten text in cursive script, continuing the text from the previous line.

Handwritten text in cursive script, continuing the text from the previous line.

東の院のまはらへも 毛らつる里をたぬゆへ

對^對丁のまはらへ

つねのまはらへ づねのまはらへ づねのまはらへ

なつと梅のまはらへ 下の梅のまはらへ 縁のまはらへ

あつと梅のまはらへ 梅のまはらへ 梅のまはらへ

梅のまはらへ 梅のまはらへ 梅のまはらへ

梅のまはらへ 梅のまはらへ 梅のまはらへ

梅のまはらへ 梅のまはらへ

梅のまはらへ 梅のまはらへ 梅のまはらへ

梅のまはらへ 梅のまはらへ 梅のまはらへ

梅のまはらへ

梅のまはらへ 梅のまはらへ 梅のまはらへ

梅のまはらへ 梅のまはらへ 梅のまはらへ

梅のまはらへ 梅のまはらへ

梅のまはらへ 梅のまはらへ 梅のまはらへ

梅のまはらへ 梅のまはらへ 梅のまはらへ

梅のまはらへ

梅のまはらへ 梅のまはらへ 梅のまはらへ

梅のまはらへ

梅のまはらへ 梅のまはらへ 梅のまはらへ

梅のまはらへ 梅のまはらへ 梅のまはらへ

梅のまはらへ 梅のまはらへ 梅のまはらへ

梅のまはらへ 梅のまはらへ 梅のまはらへ

これら

丁酉年三月廿七日
清少納言と書状の目録
丁酉年三月廿七日
清少納言と書状の目録
丁酉年三月廿七日
清少納言と書状の目録

丁酉年三月廿七日
清少納言と書状の目録

丁酉年三月廿七日
清少納言と書状の目録

丁酉年三月廿七日
清少納言と書状の目録

丁酉年三月廿七日
清少納言と書状の目録

丁酉年三月廿七日
清少納言と書状の目録

入學の旨を述べしむるに當りて
其の旨を述べしむるに當りて

其の旨を述べしむるに當りて

其の旨を述べしむるに當りて

知名抄文章院

學問の入學の時文章院の書院に於ては
名爲るにあつたは之を府中なる世に
清純の旨を述べしむるに當りて
源なりとありて

其の旨を述べしむるに當りて

其の旨を述べしむるに當りて

其の旨を述べしむるに當りて

其の旨を述べしむるに當りて

博士博士の旨を述べしむるに當りて

其の旨を述べしむるに當りて

其の旨を述べしむるに當りて

其の旨を述べしむるに當りて

其の旨を述べしむるに當りて

其の旨を述べしむるに當りて

其の旨を述べしむるに當りて

其の旨を述べしむるに當りて

行東脩し礼於其師者布一端延喜式云凡遊學者
徒徒情願入學不限年多其惣加簡試其有通經聽
願學生但諸王及五位已上子孫不煩簡試
かてこの院のちらよはさしむはくはく

と条に東院は舊司りて學問多
るにけりし方とせんともまの明りゆ
るにけりし方とせんともまの明りゆ

事とらう學士と大學寮とて試し寮試と
し試し史記と向しとせんともまの明りゆ
人と擬文章生と補す擬を王とせんともまの明りゆ
儒業とせんともまの明りゆ

學士と姓料とせんともまの明りゆ
とあやましく即功つとせんともまの明りゆ
史記と向しとせんともまの明りゆ
三ノ条ノ通とせんともまの明りゆ
業々業と補すとせんともまの明りゆ
本七十年とせんともまの明りゆ
學問とせんともまの明りゆ
と作次り業業の文とせんともまの明りゆ
進士の二科あり業業とせんともまの明りゆ
端乃人なりとせんともまの明りゆ
か中中とせんともまの明りゆ
か令とせんともまの明りゆ

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style. It begins with a large initial character on the left side of the page. The script is dense and fills most of the page.

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style. It begins with a large initial character on the left side of the page. The script is dense and fills most of the page.

そとまはらさる

かひい^三幸しむるはる

いひくはあしむるはる

あやそま^三仕。ちあはれ事善相^三の意見

下りて

中且乃日といふ事性ま試とらる事度なり。主上志遊あり。三
内々々といふ事性ま試とらる事度なり。主上志遊あり。三
三つと度との洲解あり。訓詁まやうま。三つと度との洲解あり。訓詁まやうま。三
三つと度との洲解あり。訓詁まやうま。三つと度との洲解あり。訓詁まやうま。三
三つと度との洲解あり。訓詁まやうま。三つと度との洲解あり。訓詁まやうま。三

わらわら
あはれ事善相の意見

あはれ事善相の意見

あはれ事善相の意見

あはれ事善相の意見

あはれ事善相の意見

あはれ事善相の意見

あはれ事善相の意見

あはれ事善相の意見

あはれ事善相の意見

あはれ事善相の意見

あはれ事善相の意見

あはれ事善相の意見

あはれ事善相の意見

あはれ事善相の意見

あはれ事善相の意見

あはれ事善相の意見

法
清の、善身一の、
河清の、善の、
子所^所らるる、
と、
あ、
こ、
豊後、
こ、
り、
多、
舊、
こ、

ま、
後、
か、
村、
師、
即、
佛、
由、
丁、
の、
件、
こ、

神龜元年二月廿三日勅依房前明行奉持不
款下稿三千束為長壽寺造佛料物云々
と奉まじりし事云々長原のゆり云々
中の誓書云々新信也云々
のせわれ云々云々
もろろの云々云々
ゆり云々云々
いふれ云々云々
あつらひ云々云々
からう云々云々
よもろ云々云々
小石記に曆元年九月八日奉長壽寺午時の椿

市令交易市明灯心黒木茶所堂作風韻布女
端市明三万灯云々
ら云々云々
け物云々云々
とん云々云々
あふ云々云々
の三人云々
みあ云々云々
寺部云々延長八年八月作願文送行長壽寺
奉灯明十方灯小石記云々曆三年三月奉長壽寺
百市明十方灯云々
いふ云々云々

一

かきつゝあつたてのうらみ
あつたてのうらみ
あつたてのうらみ

かきつゝあつたてのうらみ
あつたてのうらみ
あつたてのうらみ

かきつゝあつたてのうらみ
あつたてのうらみ
あつたてのうらみ

かきつゝあつたてのうらみ
あつたてのうらみ
あつたてのうらみ

不者
今案青のしつゝあつたてのうらみ

あつたてのうらみ
あつたてのうらみ
あつたてのうらみ

あつたてのうらみ
あつたてのうらみ
あつたてのうらみ

あつたてのうらみ

あつたてのうらみ
あつたてのうらみ
あつたてのうらみ

あつたてのうらみ

石道の若くは初ねははあめしけり

みいりかあわ若くはあめしけり

むいりかあわ若くはあめしけり

ましきましきましきましき

三入あしきましきましき

のいりかあわ若くはあめしけり

みいりかあわ若くはあめしけり

とらふりかあわ若くはあめしけり

あはらう若くはあめしけり

ーしきましきましきましき

ふりかあわ若くはあめしけり

むいりかあわ若くはあめしけり

あはらう若くはあめしけり

いりかあわ若くはあめしけり

はらう若くはあめしけり

のいりかあわ若くはあめしけり

中あはらう若くはあめしけり

あはらう若くはあめしけり

あはらう若くはあめしけり

あはらう若くはあめしけり

あはらう若くはあめしけり

あはらう若くはあめしけり

あはらう若くはあめしけり

白氏文集
百律後

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

志乃其りしはあしき

るまをわたりあくはつてしし師をもちらひて
貞觀改要唐太宗嘗謂侍臣曰銅為鏡可以正
衣冠以古為鏡可以知興替以人為鏡可以明得失失誤
常保州之鏡以防之過今魏徵徂逝遂亡一鏡矣今棄
人而後之是謂魏徵之亡也衣冠之
衣者表之也衣冠之便者身之便也衣冠之
亡者表之亡也衣冠之便者身之便也衣冠之
亡者表之亡也衣冠之便者身之便也衣冠之

るまをわたりあくはつてしし師をもちらひて
貞觀改要唐太宗嘗謂侍臣曰銅為鏡可以正
衣冠以古為鏡可以知興替以人為鏡可以明得失失誤
常保州之鏡以防之過今魏徵徂逝遂亡一鏡矣今棄
人而後之是謂魏徵之亡也衣冠之
衣者表之也衣冠之便者身之便也衣冠之
亡者表之亡也衣冠之便者身之便也衣冠之

志乃其りしはあしき
未摘のるまをわたりあくはつてしし師をもちらひて
貞觀改要唐太宗嘗謂侍臣曰銅為鏡可以正
衣冠以古為鏡可以知興替以人為鏡可以明得失失誤
常保州之鏡以防之過今魏徵徂逝遂亡一鏡矣今棄
人而後之是謂魏徵之亡也衣冠之
衣者表之也衣冠之便者身之便也衣冠之
亡者表之亡也衣冠之便者身之便也衣冠之

志乃其りしはあしき
未摘のるまをわたりあくはつてしし師をもちらひて
貞觀改要唐太宗嘗謂侍臣曰銅為鏡可以正
衣冠以古為鏡可以知興替以人為鏡可以明得失失誤
常保州之鏡以防之過今魏徵徂逝遂亡一鏡矣今棄
人而後之是謂魏徵之亡也衣冠之
衣者表之也衣冠之便者身之便也衣冠之
亡者表之亡也衣冠之便者身之便也衣冠之

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, starting with a large initial letter.

Handwritten text in cursive script, continuing the text from the previous line.

Handwritten text in cursive script, continuing the text from the previous line.

Handwritten text in cursive script, continuing the text from the previous line.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

いかにあはれなるか

柿の葉のいろはに

よしののちのちのち

花のよきよき

よきよきよき

よきよきよき

よきよきよき

よきよきよき

よきよきよき

よきよき

よきよきよき

よきよきよき

よきよきよき

よきよき

よきよきよき

よきよきよき

よきよきよき

よきよきよき

よきよきよき

よきよき

よきよきよき

よきよきよき

よきよきよき

よきよきよき

よきよきよき

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written on aged paper. The text is arranged in approximately 10 lines, starting from the top right and moving downwards. The script is dense and characteristic of 18th or 19th-century handwriting. The paper shows signs of age, including discoloration and some faint markings.

俗名增島之市道室秀夏信

